

## 『選択集』における道綽教学の受容と展開

佐藤 健

### はじめに

法然上人（以下尊称略）の主著である『選択集』において道綽の浄土教がどのような形において受け取られ、それが実際法然の浄土教の樹立にどのような役割を果たしたかを明らかにするのが本論の目的である。<sup>1</sup>周知のごとく道綽の教学といえれば彼の唯一の著書である『安楽集』しか存在しない。したがって『安楽集』の浄土教が法然の『選択集』においていかなる形態で用いられ、いかに法然の浄土教義の顕彰に貢献したかということになる。

概していえば「偏依善導一師」を自ら標榜する法然にとつては、道綽の地位はおのずと決まるものである。『選択集』にお

『選択集』における道綽教学の受容と展開

いても、また法然の著作とされるもの、あるいはその他法語、消息類においてもこの立場は一貫するのである。この点において法然の浄土教を指して「善導宗」と呼ぶのは的を得ているといえる。『選択集』においてもこのことは明瞭であり、一部全巻を通じて法然が選択本願の念仏一行による救済を主張するにあたって、その論拠を善導の著作に全面的に依拠するのである。勿論、法然が善導以外の浄土祖師の書物を全く用いないということではないが、いずれもそれはいわば傍証、あるいは補助的に用いられるのであって、善導に比すれば問題とならないといえる。ただ善導と諸師という観点からすれば、道綽は少しその扱いに差異が見られるのも事実である。道綽、善導というように二師を一連に受け取ろうとする態度があつたことは一応認めなければならぬであろう。道綽と法然という論点から『選

『撰集』を考える場合、ともすれば道綽の影響を過大評価する嫌いが無いともいえない。過大評価することもなく、かといつて過小評価に陥らないことに留意しながら『撰集』における道綽教学の影響を考えて見たい。

## 一、標題の文における道綽

『撰集』はまず標題の文（以下標題とする）が示され、經文あるいは釈文が引用され、そしてそれに対する法然の意見が付されている。したがって標題からすれば十六章より構成されていることになる。いま『撰集』全体の枠組みの中で道綽がどのようにとり扱われているかを見るためにその標題を列記して検討したい。（便宜上、章数を上に付し、漢文は書き下し文にする。なお、以下『撰集』はすべて土川勸学本による。カッコ内の数字は土川本の頁数を示す。）

### （標題）

第一章、道綽禪師、聖道浄土の二門を立て、聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文（1）

第二章、善導和尚、正雜二行を立てて、雜行を捨てて正行に帰するの文（11）

第三章、弥陀如来、余行を以て往生の本願としたまわず、唯だ念仏を以て往生の本願としたまえるの文（24）

第四章、三輩念仏往生の文（39）

第五章、念仏利益の文（48）

第六章、末法万年の後に余行悉く滅し、特り念仏を留むるの文（51）

第七章、弥陀の光明、余行者を照らさず、唯だ念仏の行者を攝取したまうの文（56）

第八章、念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文（60）

第九章、念仏の行者、四修の法を行すべきの文（81）

第十章、弥陀化仏の来迎、聞經の善を讃歎せず、唯念仏の行を讃歎したまうの文（86）

第十一章、雜善に約対して、念仏を讃歎するの文（88）

第十二章、釈尊、定散の諸行を付属せず、唯念仏を以て阿難に付属したまうの文（96）

第十三章、念仏を以て多善根となし、雜善を以て少善根となすの文（113）

第十四章、六方恆沙の諸仏、余行を証誠せず、唯念仏を証誠したまうの文（115）

第十五章、六方の諸仏、念仏の行者を護念したまうの文（119）

第十六章、釈迦如来、弥陀の名号を以て、慇懃に舍利弗等に付

属したまうの文 (122)

以上が標題であるが、この標題の文言からすれば一目瞭然、人師をもつて主語とするのは第一章の道綽と第二章の善導のみである。そして注目されるのは第三章以下において弥陀如来、弥陀の光明、弥陀化仏、釈尊、六方恆沙の諸仏、六方の諸仏、釈迦如来といった、阿弥陀仏、釈迦如来、そして六方の諸仏という三仏に集約される仏及びその仏の属性が主語となっている点である。標題の文言に限定して見れば、第一章の道綽、第二章の善導と、第三章以下は際立つた色彩を持つものといえないだろうか。ところでこの標題に限って言えば、第一章の道綽と第二章の善導はいわば並列される対等の関係のようにも考えられる。しかし法然が『選択集』第十六章において、善導を「弥陀の化身」と受け取り、その著『観経疏』を「証定疏」と尊崇していたことからすれば、やはり法然にとって道綽と善導は意識の中でははっきりと区別されていたと見るべきであろう。このことに関しては改めて後で取り上げる。

二、本文中における人師名、道綽、善導の用例

人師名、道綽と善導が本文においてどれぐらいの頻度で、ま

『選択集』における道綽教学の受容と展開

たどのような形態で用いられているかを検討してみたい。勿論、善導が圧倒的に多いことは予測できるが実際どうであろうか。善導と対比することにより、道綽に対する法然の態度がより鮮明になるのではないか。軽重は考えず、二師を別々に各章ごとに列挙する。

(道綽の用例)

(第一章)

1、今この浄土宗はもし道綽禅師の意に依らば、二門を立てて一切を摂す。(3)

2、この宗の中に二門を立てることは、独り道綽のみにあらず。

(7)

3、道綽禅師は涅槃の広業を闡きて、偏に西方の行を弘めしがごとし。(10)

4、いわゆる廬山の慧遠法師と慈愍三蔵と道綽・善導等これなり。(10)

5、今しばらく道綽・善導の一家に依つて、師資相承の血脉を論せば、これにまた両説あり。(11)

6、二には菩提流支三蔵、曇鸞法師、道綽禅師、善導禅師、懷感法師、少康法師なり。(11)

(第二章)

7、もし、道綽禪師の意に依らば、往生の行多しといえども束ねて二とす。(21)

(第十一章)

8、また道綽禪師念仏の一行において、始終の両益を立つ。

(95)

(第十六章)

9、道綽禪師はこれ善導和尚の師なり。(127)

10、道綽禪師はこれ師なりといえども、いまだ三昧を発さず。

(127)

以上、道綽の用例は十例である。細部の検討に入る前に善導の用例を見てみよう。

(善導の用例)

(第一章)

1、いわゆる廬山の慧遠法師と慈愍三蔵と道綽・善導等これなり。(10)

2、今しばらく道綽・善導の一家に依つて師資相承の血脈を論ぜば、これにまた両説あり。(11)

3、二には菩提流支三蔵、曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師、懷感法師、少康法師なり。(11)

(第二章)

4、善導和尚の意に依るに往生の行多しといえども、大いに分かちて二とす。(13)

5、但し親近の義、これ一なるに似たりといえども、善導の意分かちて二とす。(18)

6、今善導和尚の意、しばらく浄土の行において純雑を論ずるなり。(21)

7、但し往生の行において、二行を分かつこと善導一師に限らず。(21)

(第三章)

8、故に善導の云く。彼の仏、今現在世にましまして成仏したまへり。(36)

9、この故に今善導の引釈するところの下至の言、その意相違せず。(38)

10、但し善導と諸師、その意不同なり。諸師の釈には別して十念往生の願と云う。(38)

11、善導の独り総じて念仏往生の願と云えり。諸師の別して十念往生の願と云えるは、その意すなわち周からず。(38)

12、善導の総じて念仏往生の願といえるは、その意すなわち周ねし。(39)

(第四章)

13、善導和尚の観念法門に云く。(41)

13、善導の觀經疏の中に、上來定散兩門の益を説くといえども、  
…… (42)

14、初めに同類の助成とは、善導和尚の觀經の疏の中に五種の  
助行を挙げて、念仏の一行を助成す、これなり。(44)

15、今もし善導に依らば、初めをもつて正となすのみ。(46)

(第五章)

16、善導の礼讃に云く。それかの弥陀仏の名号を聞くことを：

…… (48)

17、しばらく善導の一意に依つてこれを謂はば、(49)

(第六章)

18、善導、懷感、恵心等の意もまたまたかくの如し。(52)

19、故に善導和尚の往生礼讃にこの文を釈して云う。(52)

20、もし善導和尚の意に依らば、この經の中にすでに弥陀如来  
の念仏往生の本願を説けり。(55)

21、故に善導の釈に云く、弘誓多門にして四十八なれども、：

…… (55)

(第七章)

22、故に善導和尚の六時礼讃に云く、弥陀の身色金山の如し、

…… (59)

(第八章)

23、明かに知んぬ、善導の意またこの二門を出でざるなり。

(80)

(第九章)

24、善導の往生礼讃に云く、また勧めて四修の法を行ぜしむ。

(81)

(第十二章)

25、また善導所釈の菩提心あり。具には疏に述るが如し。

(101)

26、今また善導和尚、諸行を廃して念仏に帰せしむるゆえんは、  
すなわち弥陀の本願たるの上、…… (111)

(第十三章)

27、善導この文を釈して云く、極楽は無為涅槃の界なれば……

…… (113)

(第十四章)

28、善導の觀念法門に云く、また弥陀經に云が如き、……

(115)

27、もし善導の意に依らば、念仏はこれ弥陀の本願なり。

(118)

(第十六章)

28、善導の法事讃にこの文を釈して云く、世尊説法の時まさに  
了らんとす。(122)

29、何ぞ彼等の師に依らずして、唯善導一師を用いるや。

(126)

30、善導和尚は偏に浄土をもつて宗となして、聖道をもつて宗とせず。故に偏に善導一師に依るなり。(126)

31、何ぞ彼等の諸師に依らずして、唯善導一師を用いるや。(127)

32、善導和尚はこれ三昧発得の人なり。道において既にその証あり。(127)

33、善導はこれ師なり。懷感はこれ弟子なり。故に師に依つて弟子に依らざるなり。(127)

34、道綽禪師はこれ善導和尚の師なり。抑また浄土の祖師なり。(127)

35、善導に問うていわく。道綽念仏す。往生を得やいなや。(128)

36、導、一茎の蓮華を弁じて、これを仏前に置かしめ……(128)

37、導、即ち定に入りて須臾に報じて曰く。(128)

38、ここに於いて心を洗い、悔謝し訖て、導に見ゆ。(128)

39、ここに知ぬ。善導和尚は行三昧を発して、力師位に堪えたり。(129)

40、静かにおもんみれば、善導の観經の疏はこれ西方の指南、行者の目足なり。(131)

41、大唐に相伝て云く。善導はこれ弥陀の化身なりと。(133)

以上の四十一例が善導の用例である。道綽と比べれば圧倒的に多いことが分かる。道綽の場合は大半が第一章に集中していると言えるし、一方善導に関しては、ほぼ全章にまたがっているが、特に第十六章に多出している。

ところで、両者においてこの人師名の用例を類別することができる。際立ったものから挙げてみると、

1、「道綽禪師、聖道、浄土の二門を立てて」あるいは「善導和尚、正雜二行を立てて」というようにそれぞれの自説を明かすような表現をするもの。

2、「道綽の意によらば」あるいは「善導和尚の意によらば」というように、それぞれの考えを一応のよりどころとする表現されたもの。

3、「道綽、善導の一家によつて」というように、二師を並列するもの。

4、「二には菩提流支三蔵、曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師」といった、相承説に関するもの。

5、「道綽禪師は善導和尚の師なり」といった二師の関連に関するもの。

6、「善導和尚の觀念法門に云く」というように、自著に付

すもの。

7、「善導と諸師、その意不同なり」というように、諸師との関連にたつもの。

に分けることができる。この中、2の「道綽の意によらば」あるいは「善導和尚の意によらば」という表現は多く見ることができ、一つの特色とも言える。道綽に関しては二例であるが、こと善導においては、七例みられる。

しかし、1と2は表現上の相違である。この「意によらば」というのは、法然が師説を依用する時の特色であって、内容的にはさして区別する意味がないといえる。そのことは例えば道綽の聖道二門を示すにあたっても、標題では「道綽禪師、聖道二門を立てて」といつているが、本文では「もし道綽禪師の意に依らば、二門を立てて」と述べ、さらに「この宗の中に二門を立てることは、独り道綽のみにあらず」としていることから明らかである。つまり、聖道、浄土という二門判別は確かに道綽の創設によるものであるが、その考えは既に曇鸞、天台、迦才、慈恩等にも見られるもので、何も道綽独自の考えではないということである。法然はそうように諸師の中、いま最も依用するにふさわしいことから、この道綽の二門を採用するというわけではないか。これは善導の教義を用いる場合においても共通することといえる。

このことは法然が道綽、または善導の釈を用いる時に、「今しばらく道綽、善導の一家に依つて」とか、「もし道綽禪師の意によらば」とか、「しばらく善導の一意によつて」とか、「もし善導の意によらば」と云う表現からも明らかである。つまり法然にとつては選択本願の念仏を一般大衆に勧めることが第一義であつて、そのための必要、最小限の要義の顕彰であつたといえる。大半は善導一師に限定しようとする意識があつたのではないか。これだけで判断するのは無理であるが、正依の経論を「三経一論」に限定し、「偏依善導一師」という姿勢を自ら表明する背景には、出来る限り夾雑物を排除することが最善であるという意識がはたらいていたといえる。

### 三、『安楽集』から引用する二文

法然が『選択集』において道綽の『安楽集』から引用するのはわずかに二文である。これは善導の著作からの引用に比べれば比較にならない。善導の『観経疏』十五文、『往生礼讃』十四文、『観念法門』七文、『法事讃』三文。善導の著作は全部で三十九文になる。また源信の『往生要集』九文と比べても『安楽集』の引用回数は決して多いとはいえない。『選択集』に引用される『安楽集』の二文をまず示しておこう。

## 一、第一章 聖道二門篇での引文

(適宜、句読点を付し、送り仮名、ルビは省く)

問曰。一切衆生皆有「仏性」。遠劫以来「値多仏」。何因至今「仍自輪廻生死不出火宅」。答曰。依大乘聖教「良由不得二種勝法以拂生死」。是以不出火宅。何者為二。一謂聖道。二謂往生淨土。其聖道一種今時難証。一由「去大聖遙遠」。二由「理深解微」。是故大集月藏經云。我末法時中億億衆生、起行修道未有一人得者。当今末法現是五濁惡世。唯有淨土一門可通入路。是故大經云。若有衆生縱令一生造惡、臨命終時「十念相續稱我名字」、若不「生者不取正覺」。又復一切衆生都不「自量」。若據大乘「真如実相第一義空。曾未措心。若論小乘修入見諦修道、乃至那含羅漢斷五下除五上、無問道俗未有其分」。縱有「人天果報皆為五戒十善能招此報」。然持得者甚希。若論「起惡造罪、何異暴風駛雨」。是以諸仏大慈勸導「淨土」。縱使「一形造惡、但能繫意、專精常能念仏、一切諸障自然消除定得往生」。何不思量「都無去心也」。(1)

## 二、第十一章 讚歎念仏篇の私釈段での引文

念仏衆生「攝取不捨。壽尽必生。此名始益」。言終益者、依「觀音授記經」云。阿彌陀仏住世長久兆載永劫亦有「滅度」。般涅槃時、唯有「觀音勢至住持安樂接引十方」。其仏滅度亦与「住世時節」等同。然彼國衆生一切無有「觀見仏者」。唯有「一向專念阿彌陀仏往生者」、常見「彌陀現在不滅」。此即是其終益也。(96)

最初の文は、第一章の冒頭に「安樂集上云」として引用されるもので、いわゆる聖道淨土の二門判を示すものとされるものである。道綽が『安樂集』第三大門の三において、我々が無始以来、生死に流転して、輪廻無窮なことを明かすのに關連して説かれる、五問答の最後の問答である。法然はこの問答を全文そのまま引用している。

次に二番目の引用文は『選択集』第十一章の私釈段に「又道綽禪師於念仏一行立始終兩益。安樂集云」として引用するもので、念仏に始終の二利益があることを明かすものである。この文は『安樂集』第四大門第二に『觀經』及び他の大乘經典の多くが念仏三昧を宗要とすることを明かす、八經典の第四の『觀



経』及びその他の経によるところからの引用である。この冒頭の「念仏衆生摂取不捨」は『観経』の第九身心観文の「光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨」によるものである。これは本来ならばその少し前の「故下経云」から引用したほうが、『観経』による始益、そして『観音授記経』による終益ということ、引用文としてはまとまっている<sup>3)</sup>。

ところで、この第一文は先にも述べたように『選択集』劈頭に引かれるものである。この『選択集』には序文に相当するようなものではなく、著者自身の撰述の意図は述べられていない。したがって一種の序章的意味をもつものと言えるのではないか。第二章以下はいわゆる念仏義に関する要文であるのに対して、この引用文には、

- 一、現代が末法時であること。
- 二、浄土の法門のみが有効であること。
- 三、一生造悪の者でも、臨終の念仏により往生が可能なこと。
- 四、それは阿弥陀仏の本願にあること。
- 五、阿弥陀仏だけでなく、釈迦、諸仏が往生を勧めていること。

六、念仏に諸障を排除するはたらきのあること。  
等が明かされているからである。

一方第二文は、第十一章の私釈段中の引用であって、念仏の

始終の二益、つまり現当二益を明かす要文としてであり、おのずから前者と比べてその比重は異なるものといえる。なお、些細なことではあるが、第一章においては「安樂集上云」として、巻名を明示しているのに対して、第十一章においては、ただ「安樂集云」というだけで上下は示されていない。

また、『選択集』十六章全体から見れば、何といっても第三章、念仏往生本願篇が主章となることはあきらかである。法然が最も力を注いだところであろう。念仏が阿弥陀仏の本願であればこそ、衆生の往生は可能である。したがって救済される側にとつてはこの本願を信じるか、信じないかの一点に集約されることになる。しかし、この本願の念仏については既に疊鸞をはじめ道綽、善導はいうに及ばず多くの祖師の明かすところである。先にも述べたように、法然にとつても究極的にはこの本願を信じるか、信じないかに帰結するのであるが、第三章のめざすところは、阿弥陀仏が諸行の中なぞ念仏を本願としたかというところにある。その理由はともかく、この『選択集』は阿弥陀仏が念仏を選択されたということを、一貫して主張するものである。この点からみれば、第一章、第二章の道綽、善導という人師の依用は本願念仏という一貫した往生浄土の真実を、第三章の序章として明かすものと受け取ることができる。先にも少し触れたが標題からみれば、第三章以下は阿弥陀仏、釈迦如

来、六方の諸仏がその標題の主語となっている。

以下、この引用する二文が具体的に『選択集』において、どのように展開しているかについて考えてみたい。まず、第一の引用文であるが、これは標題に「聖道を捨てて正しく浄土に帰する」とあることからすれば、法然は道綽が「其の聖道の一種は今の時、証しがたし」あるいは「ただ浄土の一門のみ通入すべき路なり」といった主張を受けて、このように「捨てる」と表現したものである。私釈して「今この浄土宗はもし道綽禪師の意に依らば、二門を立てて、一切を撰す」といい、「およそこの集（『安樂集』）の中に、聖道浄土の二門を立てる意は聖道を捨てて、浄土門に入らしめんがためなり」と述べている。「証しがたし」と「捨てて」とでは開きがある。法然には取捨という意識がはたらいていたと言わざるをえない。勿論、証しがたいから捨てるのではあろうが捨てられた方にとってはことは重大である。

また、法然は聖道門を定義して、「およそこの聖道門の大意は大乗及び小乗を論ぜず、この娑婆世界の中において、四乗の道を修し四乗の果を得るなり」とし、一方、往生浄土門はこれについて二つあるといい、「正に往生浄土を明かすの教」と「傍らに往生浄土を明かすの教」のあることを主張している。そして前者がいわゆる「三経一論」にもとづく浄土教のことで

ある。法然が浄土教を正傍に分けるのは、明らかに自身がこの「三経一論」による浄土教の立場に立つことを明示するものである。事実、『選択集』はこの「三経一論」の経説の範囲を越えるものではない。このように法然は道綽の『安樂集』が示す「聖道門、浄土門」という二種の勝法に導かれ、それを自らの念仏義の顕彰にうまく取り込んでいることがわかる。

例えば、もともこの二門は出離生死の法として明かされたものである。それを法然は「今この浄土宗は」というように、自らが目指す出離生死のものととして組み込んでいる。これは道綽においては浄土宗における二種の勝法であったものが、法然においてはいつのまにか、聖道門に大乗と小乗を認めるという解釈へと展開している点においてもそうである。選捨された聖道門に大乗、小乗が存在するということは一体どういうことになるのであろうか。

これは従来考えられていた大乗、小乗という仏教の規範が根本的に見直されたとはいえない。この革新性が当時一番、理解を困難にしたものであろう。つまり浄土宗とはいいますが従来の諸宗に浄土宗が一つプラスされたということではないといえる。法然の意識のなかには、従来の八宗（顕密、権実）という枠組みの外に浄土宗という仏教観がはつきりと見えていたのである。しかしこれはどこまでも意識の上でのことであり、現実の認識

においては浄土宗という一宗が新たに発生したものと理解されたのであろう。

一方、第十一章に引用される始終の両益は、先にも少し触れたように念仏の現当二世にまたがる利益を明かすものである。

『観経』留通分の「若念仏者当知。此人即是人中芬陀利華」と説く経説により、雑善の諸行に対して念仏の比類ない功德利益のあることを、善導の『観経疏』により明かすものである。したがって、『観経』そして善導の釈という大筋の中の『安楽集』の引用である。この点は一応、押さえておかねばならない。同じく『安楽集』からの引用といっても、第一章の聖浄二門判の引用とは異なるものといえる。しかもこれは雑善行、諸行に対して念仏の超絶することを証明する意図をもつもので、法然の選択念仏義と直接関係する一連の流れによるものである。

ただここで道綽との関連において、少し注目しておきたいのは『安楽集』の文を引用する少し前に、法然が「また、念仏する者は、命を捨てて已後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり」と述べていることである。この一文は、その後法然が引用する『安楽集』の「念仏の衆生を撰取して、捨てたまわず。寿尽きて必ず生ず」という始益の文に導かれたものともいえる。

#### 四、聖道、浄土二門の展開

ここで改めて『選択集』一部を通じて道綽の聖浄二門の判別がどのような広がりを示したかを検討したい。その一つの理由は、この聖道二門の教えは法然のその他の著作、あるいは法語、消息文にも多出する<sup>(4)</sup>。したがって、これは今後の課題ではあるが、いま『選択集』での展開範囲を明らかにしておく必要がある。そこで煩わしいが『選択集』における聖道、浄土の用例を各章ごとに抽出することにする。

『選択集』における聖道、浄土の用例

##### (第一章)

- 1、道綽禪師、聖道浄土の二門をたて、聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文。(1)
- 2、今この浄土宗は、もし道綽禪師の意に依らば、二門を立てて一切を撰す。いわゆる聖道門、浄土門これなり。(3)
- 3、しばらく浄土宗について略して二門を明かさば、一つには聖道門。二つには浄土門なり。(4)
- 4、初めに聖道門とは、これについて二つあり。一つには大乘。二つには小乗なり。(4)
- 5、およそこの聖道門の大意は、大乘および小乗を論ぜずこの娑婆世界の中に、四乗の道を修して四乗の果を得るなり。

(5)

6、次に往生浄土門とは、これについて二あり。一つには正に往生浄土を明かすの教。二つには傍らに往生浄土を明かすの教なり。(5)

7、およそこの宗のなかに聖道浄土の二門を立る意は聖道を捨てて、浄土門に入らしめんがためなり。(7)

8、この宗のなかに二門を立ることは、独り道綽のみにあらず。(7)

9、このなかの難行道とはすなわちこれ聖道門なり。易行道とはすなわちこれ浄土門なり。難行易行と聖道浄土とその言は異なりといえども、その意これ同じ。(8)

10、このなかの三乗とはすなわちこれ聖道門の意なり。浄土とはすなわちこれ浄土門の意なり。三乗浄土と聖道浄土とはその名異なりといえども、その意また同じ。(9)

11、たとい先に聖道門を学せる人といへども、もし浄土門においてその志しあらば、すべからく聖道を棄てて、浄土に帰すべし。(9)

12、問て曰く。聖道家の諸宗、おのおの師資相承ありや。(10)

13、今言うところの浄土宗に資師相承血脈の譜ありや。(10)  
(第六章)

14、一に聖道浄土、二教住滅の前後とは、謂わく。聖道門の諸経は先に滅す。故に経道滅尽と云う。浄土門のこの経、特に留まる。故に止住百歳と云うなり。(53)

(第八章)

15、またこの中に一切の別解、別行、異学、異見等と言うは、これ聖道門の解行学見を指すなり。その余はすなわちこれ浄土門の意なり。文にありて見るべし。明らかに知んぬ。善導の意、またこの二門を出でざるなり。(80)

(第十二章)

16、世間の師とは仁義礼智信等を教うるの師なり。出世の師とは、聖道浄土の二門等を教えるの師なり。(99)

(第十六章)

17、おもんみれば、それ速やかに生死を離れんと欲わば二種の勝法の中には、しばらく聖道を閑きて選んで浄土門に入れ。(126)

18、答えて曰く。彼等の諸師おのおのみな浄土の章疏を造るといへども、しかも浄土をもつて宗となさず、ただ聖道をもつてその宗とす。故に彼等の諸師に依らざるなり。善導和尚は偏に浄土をもつて宗として、聖道をもつて宗となさず。故に偏に善導一師に依るなり。(126)

聖道浄土を直接述べるの以上の十六文である。第一章に集中するのは当然であるが「偏依善導一師」の理由の一つにこの聖道浄土の判別をもちいて、善導がただ浄土門を宗として、聖道門を宗としないことにあるとしているのは注目される。

ここで『安樂集』の聖道浄土の二門判が法然においてどのように受け取られているかを検討したい。第一章私釈における、聖浄の展開はその説示の過程からすると次のようになっていく。

- 1、道綽の考えに基づけば、二門により仏教を明かしたことになる。

- 2、浄土宗の立場から言えば、聖道門は大乗、小乗をその中に含むものである。大乗には、顕密、権実の異なりがあるが、結局この現実の世界において四乗道を修行して仏果を獲得することを目的とする教えである。小乗は、小乗の三蔵に説かれる教えである。

一方、往生浄土門は往生浄土を専一に説く経論に基づく教えと、付带的に浄土を説く経論に基づく浄土教があるが、浄土宗の立場は前者による。

- 3、道綽が二門を立てて、浄土の信仰を勧めるのは聖道門を用いないで、浄土門への帰入を勧めることにあった。道綽はその理由を二点で示している。

- 4、浄土宗において二門を設けて浄土信仰を勧めるのは道綽

『選択集』における道綽教学の受容と展開

だけではない。曇鸞、天台、迦才、慈恩にもある。曇鸞、天台、迦才の言う難行道は聖道門のことであり、易行道は浄土門のことである。また、慈恩の言う三乗は聖道門のことであり、浄土は浄土門のことである。

- 5、先に聖道門を学す者であっても、浄土門を志願するならば即座に聖道門はやめるべきである。曇鸞、道綽でさえ聖道門から後に浄土門に転向したのである。現代の人々は速やかに浄土門に帰入すべきである。

- 6、聖道門に資師相承の血脈があるように、浄土門にも血脈がある。

法然の二門に対する主張の展開は以上のようなものである。ここにおいて注目されるのは、第一章においては、善導に全くふれないことである。ただ血脈譜において名が挙げられるのみである。意図的なのか理由は分からない。道綽の二門を曇鸞、天台、迦才、慈恩といった浄土祖師の浄土教理に拡大して普遍化しようという意志がある。

また、道綽においては、大乗という範疇において二門が考えられたが、法然においては結果的に小乗も二門の中に組み入れられることになっている。さらにこれは法然自身が指摘することではあるが、顕密あるいは権実という範疇でもって解釈することにより道綽の二門判をさらに完備する意図がみられる。こ

れは勿論、道綽の時代と法然の時代の開きによるものであるが、二門判別をもちいて浄土宗の立場を鮮明にしようと努めたことは明らかである。

ところで、具体的には示されなくても、道綽の教学がその背景に伺える点はいくつかある。例えば、曇鸞の難易二道は、『安樂集』第三大門において、「難行道、易行道を弁ず」として、『論注』冒頭の文を全面的に引用している。私釈の引用においても相当するところがすべてであるが、一部に相違する箇所がある。法然自身が『論注』の文と断つて引用しているのであるから、あえて『安樂集』の文と比較する必要はないかも知れないが、法然が『安樂集』をも見ていたとすればやはり全く問題がないともいえない。特にここは『安樂集』の二門判を依用するところである。しかし今はそのことに深く立ち入らない。

むしろ今は、法然が私釈において「今この集（『安樂集』）の意は、ただ顕大および権大を存す。故に歴劫迂迴の行にあたる」ということに關して触れておきたい。既に指摘されていることではあるが、これは、道綽が先の難易二道を明かす前に自身の告白を受けるものである。それは、

余、既自居「火界」。実想懷怖。仰惟大聖三車招慰。且羊鹿之運。權息未達。仏訶邪執障上求菩提。縦後迴向。仍名「迂迴」。若徑攀「大車」。亦是一途。只恐現居「退位」。

嶮徑遙長。自徳未立。難可昇進。（『大正藏』47、12、b）  
と吐露する。

私はすでに三界の苦しみの境界にいて、想うに実に恐れをいだいている。大聖世尊は三乗の法を説いてはいるが、声聞、縁覚という小乗の教えは、仮の安らぎであつて、むしろ菩提を妨げるものであると戒められる。たとえ後に大乘に向かったとしても、迂回としかいえない。直ちに大乘によるのも一つの方法ではあるが、自らの行徳を顧みれば、修行の道は険しく、かなり難いという。ここにはこの聖道門の仏教に対する一種の焦燥感がある。法然はこれを「歴劫迂迴の行」と見たのではないか。

次に、聖道門から浄土門に転向した例として、曇鸞、道綽を挙げていることである。私釈において「曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に帰し、道綽禪師は涅槃の広業を聞きて偏に西方の行を弘んがごとし」と勧める。そして上古の賢哲さえこのように、自らの修学をやめ、一向にあるいは偏に浄土門に帰入したのであるから、末代の凡夫にとってはなおさらこの教えを戴くべきであるという。具体的に人師を挙げて浄土門の真实性を証明するものである。

以上、第一章に限って考えてみた。続いて他章における二門の展開について考えて見なければならないが、それは今後の問

題とする。また、第十六章の道綽の三罪と善導との関連にもふれたかったが改めて考えることにする。

## おわりに

私は本稿において、法然の選択本願念仏義の實際がどこにあるかを考えることに努めた。私見をも交え結びとしたい。

『選択集』はこの選択本願の念仏義を極めて論理的に表明したものだといえる。それだけに論理の骨子というか、組み立てにおいて要を得たものではあるが、反面、人間の心象というか心理的な要素は極力排除されているともいえる。勿論成立の背景といったことも関係するが、宗教においてはこのような心情に訴えるという側面も重要である。道綽との関連においては、二書の持つ性格の異なりという点を発想の基本にすえた。

『選択集』は、現実の衆生の救済法としては念仏（本願の念仏）一行を絶対行とする。そしてそれは阿弥陀仏の本願の行であるということが、念仏以外の諸行と明確に区別されるところである。その根拠は『大経』にある。また、阿弥陀仏によって選択された行であるということも重視される。しかし、この本願の行と選択された行というのは一つのことをいうのである。阿弥陀仏によって選択されたが故に、本願の行となり得るので

ある。『選択集』は、この念仏と諸行との対比においてこの念仏義を顕正することに力が注がれている。

重要なのは念仏が真実の行であるということである。二一〇億の諸行から選取された善妙の行であり、清浄の行であるということである。それはどうしてかと言えば、阿弥陀仏が因中に菩薩の行を实践された時、一念一刹那たりとも真実心でなかったということは無いという事実である。したがって施為にあたっても真実でないことはありえないのである。仏の真実と衆生の真実との感応が念仏の相統といえる。念念の称名のなかに往生浄土は実現されるといえる。

『選択集』と道綽の関連を中心にその一端を考えて見たが、「偏依善導一師」を自ら標榜する法然にあつては、当然のことながら善導との関連が重視される。事実、本書においても善導の釈書に依るところは圧倒的に多く、『安楽集』からの引用はきわめて少ない。しかし、このように善導一師に限定して絶対的に依憑するところにこそ、法然の法然たる所以があるともいえる。第十六章において、善導を「弥陀の化身」と仰ぎ、『観経疏』を『証定疏』と戴く態度は、自らの宗教体験からなされたものといえる。それはともかくとして一応、善導を意識せずに道綽との関連を見ることが必要であろう。

『安楽集』における道綽教学の受容と展開ということ、こ

く基礎的な作業ではあるが、『選択集』に見られる人師名道綽の用例、そして聖道、浄土二門の用例を抽出して、検討を加えた。予想されたことではあるが、『選択集』においては、やはり道綽の聖道、浄土二門の提唱が、法然の仏教、浄土宗の宗意を顕正するうえで少なからず影響をもっていたといえる。『選択集』における聖道、浄土門の許容する範囲を見定めておくことは必要であるといえる。周知のように、この聖道、浄土門という言葉は、『選択集』以外の法然の著作とされるもの、法語あるいは消息において多くみられる。今後はそういったものをも視野にいれて見る必要があるだろう。

以上

## 註

- (1) 山本仏骨は『道綽教学の研究』(一三〇頁以下)において、聖浄二門判は道綽滅(六四五)、五五三年をへて、日本の法然において初めて採用されたもので、次の諸点において道綽の影響があるとする。①難行道は聖道門であり、易行道は浄土門であるとするのは、『安樂集』第三大門の難易二道の説示を受けるものである。②三經一論の提唱は、第八大門に示される八經二論にも影響されている。③念仏の止住百歳の説示は、第六大門の經の住滅、第二大門の異見邪執等に見られる一連のものによる。④念仏者の現当二益は、第四大門、始終の両益を引用している。⑤八選択の選択我名は、第四大門の『般舟三昧經』の引文等の影響も考えられるとしている。

- (2) 石井教道著『選択集の研究 総論篇』(二七三頁以下)には『選択集』引所の經論疏が詳細に示されている。いま善導の釈文の引用回数はこれによる。

- (3) 「故下經云」から引用すれば、『安樂集云故下經云念仏衆生……』となり、文脈が煩わしくなることを恐れたのか、本来あったものが欠落したのかも知れない。ただ「故下經云」の「下」の意味が明確でない。良忠は『安樂集私記』に「故下經等者、下字不正歟。或対諸觀、云下經云也」(『浄全』1、737)と述べている。

- 善導の『觀念法門』(依經明五種増上緣義一卷)には、「又如下經云」という用例が八例みられる。その用例から判断すると、『觀經』の文が連続して引用される時、前の引用文より經典の後の説示を引く場合に限って用いられている。つまり、順序を追って經説が引かれる時の用例である。最初は「觀經下云」、あるいは「如觀經説云」と、『觀經』の文が引用された後に、重ねて引用する場合に「下經云」とする。良忠がいうように確かに諸觀に関する引文である。このことからすると、『安樂集』「故下經云」の前には、「身心觀文」以前の何らかの「觀經」の引文があったと考えられる。

- (4) 例えば『往生大要抄』には「聖道の一門をさしおきて、浄土の一門にいらんとおもはん人は、道綽善導の釈をもて所依の三部經を習ふべきなり」(『法然全』51)とあり、『念仏大意』には「シカルヲ道綽禪師ハ決定往生ノ先達也、智恵フカクシテ講説ヲ修シタマヒキ……タタスミヤカニ弥陀如来ノ願、釈迦如来ノ説、道綽善導ノ釈ヲマモルニ、難行ヲ修シテ極樂ノ果ヲ不定ニ存セムヨリハ、専修ノ業ヲ行シテ往生ノノソミヲ決定スヘキ也」(『法然全』411)等は道綽善導を一連に見るものといえる。

- (5) 例えば、難行の理由として示される五つの事例の第四において、『選択集』には「顛倒善果、能壞梵行」とあるが、『安樂集』では



「所有人天顛倒善果、壞人梵行」（『大正藏』47、12、b）とある。  
また、易行道を明かすところには、『選択集』では「但、以信仏因縁願生浄土、乗仏願力便往生」とあるが、『安樂集』では、「以信仏因縁願生浄土。起心立徳修諸行業。仏願力故即便往生」（『大正藏』47、12、b）とある。特に後者は注目される。